



新雨夜集

初編

| |
|------|
| ~ 5 |
| 5640 |
| 2 |



門へ5
號 5640
巻 2

新編東集序

吾人唯花を主として集を編するは
よむ可なりしもの流氏を主として巻を
編するはあつたるものなりしを後
志を以て後編を編し又と編を
以て彼馬の編を以て編するを
新の編を以て編するを十七
諸國を以て十帖を編するを



可憐なる情態をいふはあはれなる
子にふはる新なるはあはれなる
あはれなるはあはれなるはあはれなる
あはれなるはあはれなるはあはれなる

あはれなるはあはれなる

あはれなるはあはれなる

新雨和集

石二晴を山多と老とありにひる

唯嶺居士

春の用をよみ入るはあはれなる

若鳴

籠の蓋明も朝のそねり

卓郎

花柳のそねり

曲江

猿をいたつたはあはれなる

長樂

紫おとくはあはれなる

季春

白より海を月と船と驚水

風高

黒くなる程むきも様も

松史

下略

青風も阿曇程吹り帆の丸に

山岸

芥舎

蒼の来ぬ程舟の是も

公成

棹替へ庭舟もさうり赤棹

淡節

之を陸も並に空に船の棹

久海

若竹やはうわける船と残き

糸魚

舟の静を船にさやぬ浪水

大塚

岩の揺るも空にうり舟

島谷

さざりくの枝を船のよさを柳

梅西

風も吹く切左の内や月と梅

有節

芥は青や初はさやう鏡の嘴

梅は

鼎左

雀の空をさやう船に羽子の音

孝屋

舟の灯の左をく懐る哉

松隣

居るつゝも 夢をゆき なる青い 白鷗

よききりや 猿皮や とも 摺り 杜鵑

梅子 多くの 伯 居る けい 林曹

あゝ 雲の 影り 飛 あり 雪の上 可太

物の ところ なる 水 花 君 あり 松 此松

細 鱗子 ちげん い 多く 難 奏 九起

振袖の 持 あり あり なる 蓮 見 船 井派

根 跡 あり あり なる 只 雲 なる 香玉女

石 用 なる なる なる なる 衣 相挽 立字

耳 なる なる なる なる なる 若 薫出

こは なる なる なる なる なる 留香

星 柳 や 老 芳 なる なる なる 標 堂

雲 あり なる 船の なる なる なる 可 願

不二 陣 なる なる なる なる 真 菊

手 なる なる なる なる なる 乙 居

身 なる なる なる なる なる 本 雜

山丁内海より北朝やけりてきん

洞窟

一りの面より春やあがりてしり

三友

ふれふかくて黄き子りや香り那

冰雪

あり数やふやうと道にそは針子

井壽

そる花子来いといぬる春い

前水

難の相唐ふりてやいそき世中

松丈

貴身やいと教こいといそき世中

玉妹女

随道よりまをる花よりり世の清き

亀水

船やうと世に十をの船あふてまの市

真夏

ありまは中よりいそき世中

莖外

庭をうらうと世にうらうと世の清き

有来

葉の香や灯の籠て解板を

庭面

松さの香梅乃玉月とあがりて

花山

居る如きと世にうらうと世の清き

燕了

朝朝も来例のうらうと世の清き

雪月

碎心も来例のうらうと世の清き

葛古

ふまは園のあきまへに會中

由水

はき流す蘇のさかや初め

柔水

ほそあももあまのふさくよき

紫好

あまのさきまへにほくまはあ

柯雪

あまのさきまへにほくまはあ

烟岳

あまのさきまへにほくまはあ

志石

あまのさきまへにほくまはあ

六老

あまのさきまへにほくまはあ

三ッ枝

あまのさきまへにほくまはあ

妙元

あまのさきまへにほくまはあ

半路

あまのさきまへにほくまはあ

凸山

あまのさきまへにほくまはあ

菱吉女

あまのさきまへにほくまはあ

若松

あまのさきまへにほくまはあ

若木

あまのさきまへにほくまはあ

梅下

あまのさきまへにほくまはあ

半山

〜花の匂きと〜
三つお

〜花の匂きと〜
智く

〜花の匂きと〜
行成

〜花の匂きと〜
柳水

〜花の匂きと〜
一兮

〜花の匂きと〜
川位

〜花の匂きと〜
与山

〜花の匂きと〜
一辨

〜花の匂きと〜
龜園

〜花の匂きと〜
洗耳

〜花の匂きと〜
鳥象

〜花の匂きと〜
小松

〜花の匂きと〜
硯水

〜花の匂きと〜
楠翠

〜花の匂きと〜
一徳

〜花の匂きと〜
藍水

六

有る月の森をいそぐ神皇月

延一

ゆるがせのやうに低くある

水

みる能く極まるにふるもく

羊石

能くかゝるも味もよくあつた

水

糧船とくわゆるやうにたゞ

角

松の葉の香りのとくもよく

惟文

ゆゑにゆくはたふありおき

一身

手紙をよめるあつた福根芥

蘆壺

雲のふかふかしたる月夜

雲夫

細くもよめるあつた梅のむ

梅叟

古の歌よるあつた歌に保保

園

あつた野とてゆくあつた

壺

蘆花や雪の土に飛とる

吹池

あつたあつたあつたあつた

汲古

あつたあつたあつたあつた

杜流

あつたあつたあつたあつた

月那

二

水

月正とてこといふはあり居あり

月恒

子の戸が居あり月と松の空

藤丸

元と此空とて常りありあり

山竹

味解の井の道はくも在る哉

紫文

遠かきとて常りありあり

水竹

七月や川よと秋の風乃と

耕行

あこせりて手とて常りありあり

松芳

地よとせりて手とて常りありあり

方耕

梅うきとて常りありあり

其天

穀入やとて常りありあり

一川

空にとて常りありあり

浦月

去月の空とて常りありあり

茶鼻

山とて常りありあり

鷹丸

水の芳とて常りありあり

伯翁

空はよとて常りありあり

梅儂

江戸

西馬

町中や像よ自の形 景を

永機

権の系此表とくも乃形此小

只吉

少後とを好よ有多と網涼り那

お雅

唯方や身さうにこそ記 雲

花海

や〜はよありり等やそり花

乃久位

そり花種多〜のよ此の形と〜を

季由

あり程相よ〜〜〜〜〜の序

祖郷

おのれや 幸ふ〜〜〜〜〜

松頂

依此をよ書り〜〜〜〜〜

芽愛

を系念のよ〜〜〜〜〜

秀芸

そつ社を願〜〜〜〜〜

蕨富

少中社和田や 船の形此と〜

眉手

精の系此表とくも乃形此小

一竹

や〜の 油形を信〜〜〜

柳隣

等々〜ぬ 江のさ〜〜〜

漣

右〜の 船〜〜〜〜

漣

糸糸の結をうたはしる

具外

稲妻の雲をうたはしる

雲波

火のくまを結の白紙か麻の梅

埃外

名ぬる雨の中へ結へ雲をうたはしる

梅村

翻す雲のくまをうたはしる

谷鶴

雲の二層をうたはしる

美交

雲をうたはしる

片山

雲をうたはしる

鳥吟

雲をうたはしる

不深

雲をうたはしる

まぐ椎

雲をうたはしる

字字

雲をうたはしる

字字

雲をうたはしる

梅司

雲をうたはしる

紫若

雲をうたはしる

生々

雲をうたはしる

得蒸

晴市蝶多し一在るもあらず

香以

空しく下ゆ所なり一斗斗

叩月

種おろし一層お月さ良角田

樹石

去かきぬも動さ落つく雲う好

靖淡

乙多や高し高けき軒を到

鴉

里よりりの白路は替る田植い

拾淑

草花菜よとや物能あるの扱う奇

花少

早の急のやうな路よふぬ路

苔交

昔物此よりよふると能く藤の節

立休

和橋台の岸路只をほき一庭

山子

雲多し一もふらぬ村田少

表手

空より白路さふも能く雲よなり

集我

耳とらるも眼より望みたり秋の山

古風

空より雲も花もさや松の歌

可蕭

あめ降 結をさるる老の衣明少

籠草

水仙や志ねんとしたまふの二三枚

尋香

和興貴や竹と花を只此のこ

氷壺

竹影を翫くは花を色に如帰

拙傳

眼を空に花を畫や白牡丹

羽香

花一移るは花のほろけの中

華位

摘花をよむは花をよむは花をよむ

芳州

田はくちや花をよむは花をよむ

菅磨

晴をよむは花をよむは花をよむ

鳥真

花をよむは花をよむは花をよむ

魯心

素芝草ある人まの門が和乃令

瓦村

まの芝草ある人まの門が和乃令

素柳

花のける月の深き一は具滔

珠在

まの芝草ある人まの門が和乃令

群心

花のける月の深き一は具滔

蒼彦

まの芝草ある人まの門が和乃令

素氏

花のける月の深き一は具滔

茅城

花のける月の深き一は具滔

由之

秋のやうにまがくいそまふ山

上七

竹烟

秋のやうにまがくいそまふ山

甘湖

清らかなるくさくさの香のうら

海花

秋のやうにまがくいそまふ山

翠峯

秋のやうにまがくいそまふ山

玉英

秋のやうにまがくいそまふ山

秋石

秋のやうにまがくいそまふ山

如牛

秋のやうにまがくいそまふ山

心足

秋のやうにまがくいそまふ山

木芝

秋のやうにまがくいそまふ山

つる

秋のやうにまがくいそまふ山

古碑

秋のやうにまがくいそまふ山

一藤

秋のやうにまがくいそまふ山

松洲

秋のやうにまがくいそまふ山

松中

秋のやうにまがくいそまふ山

可言

秋のやうにまがくいそまふ山

古人
左高

ほろろ根のちをさくむ小葉が

旦山

常月を空に映らすや影の毒

晴峯

短衣を纏く海より舟

得衣

月一をたうらむかきと火と虫

古の岐

夕立よ止りて月のかげを照らし

溜水

蓮さくや田舎子やうの休村

柳月

陰もの名を山鳥や小雀のまゝ

南隣

障子よ水は老るや春のけしき

壽仙

まじりて花をたふす影は風乃を

芸城

こぼれふらむくは白き木槿小

如山

夏秋や露もく降ぬ風のゆく

忍菴

聲を聞えよや弓とく光

茶井

空遊や種はこゝろの悟の外

汲菴

新島の竹を煮くそ有萩の林

梅安

まじりて空を照らす月山は雪

五峯

和歌のまじりてはさく月影が

音集

新しきくぬや降霜の風呂上里

百丈

ふもよりのも積白の若く一船き帯

一柱

新兵よ若のきたをあうりくめ

む然

旅麻しとや神の途い

菊外

秋の風梢をきたを相一葉

竹麻呂

氷を皇孫をきたをあうりくめ

桑魯

去風やりのよききくぬや

折圃

山岳や若く一飽く去の氷

一朗

初禮美をきたをあうりくめ

雲水

大莫

新風やりのよききくぬや

未豆

経系社がわりのよききくぬや

南屋

雲有るもあま法も重に望の月相

石外

むもあま望のよききくぬや

江平

さつりしあま望のよききくぬや

遠居

見もあま望のよききくぬや

善生

つ月の望白のよききくぬや

音好

笠清や

笠清や

立笠

手まわすお涼しき面を

志行

影まろ柳のうらや

志行

空まけぬを味しや

一雨

身くやまぬふらさるる

波同

ま〜くさ流す涼し

空翠

具あふの雨き氣さ

子莫

波面松かきうら

五律

鏡まもたも作らぬ

白雲

あそく先をや只の

まき雄

流の身城わきれ

法衣

影くやあ〜をま

斗米

あま行あふの

北松

大さの入お掃

層坊

夢く槽まさる

三糸

身ま〜く梅や

可食

母

某

なまきりや初観音の人 逢り

安五

姨捨や西に明て多き新の山

呉吉

鳥巾うらねくさるる家元掛えり

田木

雪の法け子下一月ふき起り

呉風

おろすね井もあは猫の巻

柳五

あきしるる衣はゆめをさるる

若鳴

あはるる常もくろき下前

於夢

持るる衣は乃 遠き

鳴

持るる衣は乃 遠き

鳴

いほよかひ月の輪 立ちよき

鳴

禁ありしはるる衣の初

鳴

合後よやく水を時も 宿よ せ

鳴

宿もさるるの 弁塔婆 海

鳴

子つはるとあはるる 夢の 髪切

鳴

鳥は 巨魁よりきき 春と

鳴

口をよみよく口印く唇をうら

鳴

さしつねをゆきりおのたみ漬

鳴

三日月をうへりうまに持てり

鳴

佐倉まを馬もいそぐ秋を

鳴

今宵のま撲るの名をう志水

鳴

あまの雲を氣のゆるまにあり

鳴

さうさうとさう散たらう障子あり

鳴

あまのつゆをいづれもくもく

鳴

曲りて我とよにまを去りてあ

鳴

鐘はく寺に右教うは文

鳴

石らしてあふぬるり響き

鳴

さしつねの形をゆきり

鳴

わの雛は情をいづれもくもく

鳴

おのよまをいづれもくもく

鳴

名のある程をうは樹のあふ

鳴

あふまをいづれもくもく

鳴

世

中津のうらやまの葉をむすはし

葉

石のうらやまの葉をむすはし

葉

中津のうらやまの葉をむすはし

葉

少鷹のうらやまの葉をむすはし

葉

樞のうらやまの葉をむすはし

葉

唐申塔のうらやまの葉をむすはし

葉

中津のうらやまの葉をむすはし

葉

四角のうらやまの葉をむすはし

葉

中津のうらやまの葉をむすはし

葉

里のうらやまの葉をむすはし

葉

中津のうらやまの葉をむすはし

伊勢

雀雙

中津のうらやまの葉をむすはし

立岩

夕霧のうらやまの葉をむすはし

依傍

白のうらやまの葉をむすはし

兼雨

中津のうらやまの葉をむすはし

初岐雄

葉

高きはつとありて反を以て是なり

尾法 二六

而居

明きくぬををわらふ如くを

茨山

吹き水に里静なりおける月

一浪

掃く水に餘水のやあり梅の香

鵬居

福の香の中隣り多き能道なり

三何

蓮宇

為縁よ雲の花あり 儂 雨

陳文

一人を伴ふに院に一葉を

走江

杜水

嬉しきに写る子雲なる如の雨

貞山

日影も夕影も白くお本権

加賀

江波

細園空にわたり方も我を山

大若

白雲にわたり方も我を山

真澄

梅の香にわたり方も我を山

下路

文哉

萩の香にわたり方も我を山

直哉

和の香にわたり方も我を山

松休

春の香にわたり方も我を山

久丸

梅の香にわたり方も我を山

月杵

尾法

藤子屠蘇病し之後ハ餅子なり

藤子

朝うけやいふ夢を掃きけしのか

斗社

隣りうりぬるは浅き、なまさう形

快哉

名鶴うけは、赤豆まのまは蓮の月

ぬ泉

さくらとて、波ねねとて、なまなかり

樊圃

白雲に紅花さし、なまなかりの村雨

静里

土中の青が、持てなまなかり、若くはそと

五湖

ぬはと青は、なまなかり、社の屋

松嶋

なまなかりの、赤てなまなかり、松心

種麦

赤毛を海へ、なまなかり、廿雨の

仁里

船とかく水、神門吹越木のそと家

舟山

裸火をとめ、なまなかり、櫓のまゝおが

壺長

なまなかりの、赤てなまなかり、社の月

至法

梅子雪、赤の、赤てなまなかり、赤が

平山

山赤、赤てなまなかり、なまなかり、赤

而學

と赤てなまなかり、なまなかり、村雨の

松井

懐子道ある山やあまこや

官知

冬の月吹送とさ水乞ふより

吟村

芥あふふあまも濁ぬぬ底の好

可夕

冬の灯乃船子廣ある燈小

一受

船陸や麦の中かゝ帰る層

一直

甘不しに有花かさるをわ世とらり

柳言

荃那とつちと松陰の清水小

花笑

五月るや生も怪初ふあは疎

輝丹

魚まきま望中踏りぬ若の春

再味

名不翻うふおむ保一蓮花も

鶴老

夕まや降中か節まに松家 船

友松

春買うあまのまは白あや海の梅

春暮

夕事ゆや船は烟り止水より

詠毒

山後や井ノ夕のまきんあを孝

以思

初ゆや船まきんに浮森を

撰後

吉齋

都くあくあけま乃指小

乙良

船をたふさふと登りて新の茶

茶山

夕暮れに垣を渡りて乳首をい子

垣登

月丸く星を看たり猫の志

素明

松を看たりて心のおりて神

山之

六月ありて新の茶人 茶

呉烟

里人ありてぬ 茶ありて茶をい子

市精

雨止るに茶をい子 茶ありて茶をい子

合裁

湯をい子に茶をい子 茶ありて茶をい子

管眠

四出ありて茶をい子 茶ありて茶をい子

季山

和茶ありて茶をい子 茶ありて茶をい子

大経

福茶ありて茶をい子 茶ありて茶をい子

舎用

白影ありて茶をい子 茶ありて茶をい子

江三

初月ありて茶をい子 茶ありて茶をい子

飯上女

茶をい子に茶をい子 茶ありて茶をい子

吟吟

その茶ありて茶をい子 茶ありて茶をい子

坡山

降ありて茶をい子 茶ありて茶をい子

子考

下野

真風に吹去の柳の井水子亮
 恩成
 松
 孤
 士明
 木石
 一二
 森雀
 種好
 葉をこくとあや小束のこえ限
 五月のや一日空をこをけ
 かこふまー日影をくもや心左

天賦
 榎翁
 清湖
 清和
 雨郷
 南海
 鑑
 林水
 町をよーとな水とあや柳の巻
 くれおれおとあや石乃上
 法念をくはやきぬこの登隣
 伊達あやあやあや外をさ芒小
 水をぬあは難波乃層月お
 榎柳子葉の巻ーまおうお
 ままのあは皆ま山の卯月小
 葉の火乃烟よやくゆきうお

春の月 世に雲低く 夢よりの

上落

素悠

昔際を 夢に見る 夢の影

和法

春の月 夢に 夢の影

池柳

夢の影 夢の影 夢の影

素宣

野の影 湖只を 夢の影

秋成

夢の影 夢の影 夢の影

洛山

朝の影 夢の影 夢の影

睡月

大空を 夢の影 夢の影

由儀

夢の影 夢の影 夢の影

上落

卜林

あはれを 夢の影 夢の影

馬雞

夢の影 夢の影 夢の影

葉山

夕景の 夢の影 夢の影

梅嶺

夢の影 夢の影 夢の影

清碧

樹の影 夢の影 夢の影

加梅

夢の影 夢の影 夢の影

雀汀

銀板も 夢の影 夢の影

煙南

白のきし〜とく〜〜〜杭の先

支分

蟹を踏ふくちもたふさふも鞠うけ

春吹

床の褥ききをいよふ 碓りか

織り女

茎あくと流し〜寄せう 冬乃雨

右甲

秋の蟻死たう水と地にまきう 亀

一儂

地よ月とあふた 風尾ふ木の葉さ

よもぎ

す分たの影子ありぬ 扇 来 ぬ

丁好

出をなれと 巫根月のこきうら

糸山

皆用のちれ 教法をや夕 廻 涼

ぬ紫

さうと村おやうを風た〜 学お

萩翁

漣くさ舟水はさうり 春の風

香圃

舟とあは中や 夢風のを 響

保山

国よおすのちをも流しを〜 水

嵐松

白影のまゆやお葉の思〜

梅郷

雨の白い早〜 白葉〜

碓透

ふた〜白ゆたを〜ぬ 屋平 藤 小

湛々

手

葉の香りのもよほの香気は

香在

花の匂いとはよくはらう

好雲

花の匂いとはよくはらう

一知

中戸は遠きむらさき色

若江

持整え雪のよけり

飯師

影をさす月の影

九夜

あつとともも

凍斗

影のやまらた

糸尾

葉垣の秋をを

一響

をさすも

か杯

葉垣の秋をを

子岸

叶のる水と

湖村

葉垣の秋をを

瓢

葉垣の秋をを

即水

掃よき

友竹

葉垣の秋をを

蘇登

初より萩よりたりて鳴きなり
九鼻

吹きりし風を尾古の音よりし
秋扇

二月の八日観也あら若葉
為則

うき世に成りしうめを水
木お

海をよみたりしや花のむ
一夜

あまの山とてや物もさ
梅苑

夢のや恒程の風は不のこ
木一

月もささるやうなる
置嶺

行秋やうき音も夢やう家
刺山

猶もささる人もあつる温繁像
涉江

酒の世やの世にへみのおる月
法菴

きのまゝとありありあつる子
森手

朝乃懐舞へまゝとらうたえれ
珮琴

形と較へるこゝ白く萩の梅
梅月

よぬまおこ人をささるやうに
古宿

ふゆへ音吹の世にや鬼瓦
栗山

乙名や井水夫のあはれ出たり

冬来

折燈をかき寄せをばきりし

さよ表

雪の灯は消るまゝの破る子

張河

渡山

たすのあはれをさるさうの夜月

露々

ゆげやま田の果は海の音

月柳

舟をこて船吹きくわのれり

桑史

雪のまを湯あをさや夫の水

碧山

白は雪もさるまのさし村雪

仙亮

雪解を稲穂折れぬを雪向は雪

信品

閑翁

雪ははに雪も吹く一月は雨

雪頂

雪解雪もさるまのさし村雪

石窗

大粒よ雪は雪向く牡丹う羽

橋系

雨さるはは雪も吹く雪水鏡

士山

大雪や松をさ雪のさつ白は

芝晴

心とやほろくさる稲の雪

可月

和雪吹くは雪とさるぬ杜若

木琴

三十一

低山よりゆるゆるなる谷の如

碧流

流るる隙に水は移る木の実は

一之

忽然と水はつるや月の隈

如雲丸

山はも降る水はも似る岸の雨

其社

子と氣はるる水はも一板と星

空布

去る一帯は瀧に下りあけあけ

竟氏

舟の中船の如き舟を 神 宿

一布

舟は空舟よりなる舟 十三 廻

阿公

今山城の如き舟は舟 月夜舟

若彦

若彦の如き舟は舟の如き舟

保水

舟は舟の中あやめ舟は舟の中

桂子

舟は舟の如き舟は舟の如き舟

葉雅

舟は舟の如き舟は舟の如き舟

葉晃

舟は舟の如き舟は舟の如き舟

若南

二階より舟は舟の中 舟 葉

一控

舟は舟の如き舟は舟の如き舟

常叶

三十一

好まじきものやうらなひのそと

雨笠

つらき世をたのむかきるゝ

月泉

小まき土情におもひける枯壁の

快雅

米買ふまゝ山にまじりて

左右

影はつききつ後の月や初

玉鼎

水は清やわづらひて

松翠

名知さるるをばあはれ

梅州

後のつゝあはれや春あはれ

舞水

風よ身に軽きまはるや

醉壺

月鏡のそと

波羅

ふらふらと

楽只

一ふらふらと

菊泉

ふらふらと

扇三

その茶碗も

二老

飛く舟は

音好

朝あはれ

菊翁

三

三

名のこまの橋もかきこむありよら星 天隨

少海も潮もやまの北巻 五折

障さうに傳のこまも 回歩の解 染水

あつしやのこまも 池の水 雪山

舟やまのこまの 舟の 舟家 舟儀

雪解もも 舟言も 舟小巻 舟家 舟儀

夜も舟やのこまの 舟の 舟家 舟儀

ゆ〜秋のこまの 舟の 舟家 舟儀 久也

舟もやのこまの 舟の 舟家 舟儀 五調

舟もやのこまの 舟の 舟家 舟儀 谷佳

巨艦もやのこまの 舟の 舟家 舟儀 巴休

吹舟もやのこまの 舟の 舟家 舟儀 白堂

舟の子や牡丹島もやのこまの 舟の 舟家 舟儀 一標

舟もやのこまの 舟の 舟家 舟儀 亀明

舟もやのこまの 舟の 舟家 舟儀 九王波

舟もやのこまの 舟の 舟家 舟儀 有信

あけつあそよきふくまかきやの面

三菱

油う降もきしきき籠里

益水

あそよの羽根よ夕夕秋夜まじり

清秋

水仙の影り真砂各々 雞四五羽

方水

きふふあ人の少婦くさふの屋

泉二

白蛇ありよさうきききあむ世山止

竹翠

はるるももかかきさうお 機衣

敬里

きく懐き人よもききき梅りお

茂菜

多思かまても舌松補佐き新河ふ

一帯

まの川も代をくさく下まきり

如川

系文もゆきよかきや 風巾

竹抱

あつきのさうたふ者や 和日のか

梅雪

うさかやまもあ人もさふ人

簾女

おきき松枝の影のくせあう神

佳松

象まにききんや 鹿の香あ子

松雲

和ふあよきあきさうき 香の川

物外

| | |
|----------------|----|
| 和と書をもとくしつる大津沙 | 七朗 |
| 桑若此書をありて梅の花 | 如春 |
| 能く喜ぶ人の言もや海一舟 | 山彦 |
| 扇も秋をさるの志ありし | 香谷 |
| 袴も中乳母よさきせし小娘屋 | 甘雨 |
| 陽の圓も秋をさるるやと年来 | 石柳 |
| ふゆくも以猫の布さおる籠 | 清雨 |
| 去ぬるるも刻る字の書と西瓜沙 | 結二 |

| | |
|----------------|-----|
| と秋の神のまをぬけたる幸矢水 | 如孫 |
| と秋の神のまをぬけたる幸矢水 | 拾翠 |
| 市中いあひのこもなまり村者 | 都井 |
| 法をまてまをさるるは横をり | 如の良 |
| おと水候も秋も梅もや梅一川 | 心雅女 |
| 秋もさるるは梅もや梅一川 | 秋里 |
| 行雲も秋も梅もや梅一川 | 鳥府 |
| と梅もさるるは梅もや梅一川 | 志仙 |

降る雨も暑もささげり磯やの春

三九

樹々の葉は春の山風物空

未全

糸車を一舟遊ばわさし

逢山

翌日の朝にやうに晴る小春う羽

大朴

情舞やわつらの旅は春後うけ

丁々

小田恥との情を聞ある社より春

茶水

名月や里紙をわけて煙の烟

名船

元日や依原の蘆つと静の我

吾佛

冬は春や身より馴るる風は音

白峯

海人うすた静くはるる春をのま

島原

草々も春もささげり春の音

玉川

春は春や身より馴るる風は音

草徑

夕月よ春もささげり春の音

池月

春は春や身より馴るる風は音

釜吉

春は春や身より馴るる風は音

草花

春は春や身より馴るる風は音

静一

涼しき朝夕かきるききき

迎祥

陰のちやうくあかく清る神

ノ左

ぬりもせし柳よ持や表の葉

銀葉

子梅をいやしきき白紙後

直布

三秋や我れをちうけし木も

江水

月予けそちゆ極ききき

雨竹

風をちうけしききき西風小

聿至

掃推よききき山家の和村雨

月園

夕ゆけのちよききき

鶴村

雪もし灯のさうぬ四隅か木縁

采外

きききききききき

柳南

卯のちやうく西もあけり

春齋

唐もしききききき

梅人

落紅よけきききき

三才雪

上層のききききき

歩雪

おもききききき

葵火

三才

梅の香や雨の音か花を暮らす

はく堂

三つ日よきと風よきと花を

一朗

花の影を空に花をさかや

秋雁

夕きや雨をさかや

春水

降る雨をさかや

観水

花をさかや

風柳

花をさかや

文栞

花をさかや

二作

花をさかや

惜炭

花をさかや

幸九

花をさかや

柏富

花をさかや

卓炭

花をさかや

産齋

花をさかや

雲田

花をさかや

文文

花をさかや

玉文

三

雲杉流しあふ洞涼々那

泉寺

息うけあやを考や去の月

百派

昔の身も船はゆるや茶社路仕

柳起

葉中石に程いりけ成る歳まじ

群月

こゝろこゝろ身世も雨の星も

梅春

解けあは灯のこゝろをほほほ

管石

新点々様をぬる城春少

田月

子春子こゝろを雨の味も

岩

枯樹の心もむ解と新く

瑞如

松風社起を登森城か

鶴々

拙筆の意もむる改歌古音

素格

と新社社體も宗社身世も家

斗衛

兄ゆゑの心もあはる月のお

梅塘

物もゆる船社料理中し

大江

こゝろこゝろ回しこゝろを和

あり子

世帯こゝろこゝろ漕舟のこゝろ

春茶

三十一

詠ありし一葉の風を浴びし初る序

長森

謝絶をいふと望みもあらず月

清原

新秋をいふの意をいふ秋の序

雅香

是れ羽子を女子をいふをいふ序

蒼山

月をいふ一葉の風をいふ梅の序

雨玉

春柳をいふ風をいふをいふ序

梅一

秋をいふをいふをいふ一葉の序

博志

田舎の序をいふをいふをいふの序

林外

道ありし一葉の風をいふ序

如風

暮らする序をいふをいふ序

如雪

秋の序をいふをいふをいふの序

梅史

秋の序をいふをいふをいふの序

幸丸

秋の序をいふをいふをいふの序

河波

菊次

秋の序をいふをいふをいふの序

藤雷

秋の序をいふをいふをいふの序

藤村

秋の序をいふをいふをいふの序

藤丘

新産を海苔よとてまゝ 白く少 江戸 為山

吹くくまをまぬくま 曇り好 蕉菜

きねーさか木入とてあり 若菜を 静菜

月まゝ一足釣一智り里行 良松

白面やまをとり 白き方あり 若菜

見まゝよまを若 巨浪

縁は波釣瓶のおま 表二

星舎や 未熟な菜も 甘菜

降参りや 原北や 芋裁

あま 新お

揚げた 飲志

や 丹金

さ 等菜

種 波鱈

は 無名

松 古むね

在松前

一秋多し風情も奇しにゆくを

控筆

月影との梅より帰ぬ来もな

花亭

浮もせも清もさうくはありの柳

蕉阿

晴ぬやいさぬ柳の風情をき

煙蓑

空もゆるやめさうるきのあとに子

惟精

柳よのちや眼のぼんやりぬのま

松叟

あゝ雪の月とさゆけなく思ひしり

在哉

きくこえー三日月より秋を遠し

永年

梅の月とともありあゝ空さう柳

閑疎

梅のせうぬ縁人ゆりー天の川

汝歌

鴉のさむさむしにあり月影

瓢念

ちやゆに地を歩むつると人さう柳

五井

慈猫と野蒜とふもるゝ老もきけ

孝九

春もあを波より吹そかやまか

慈舎

梅さうや柳さう招のまぬゆり

宜福

梅よ山より梅よ人を接をき

風州

11

ちりそよ咽りもあうは雪の月 由誓

木更のこ鏡よ水の月ありま 物外

道う身も浅さぬ亭や和うは 卜州

萩のこちんをま 隅田の柳よ 也豆

鳴中しをあたしく梅の庭さうな 半舎

あしふやせ梅すゝふかき茶ふ 木翁

下戸はまよるの詠向おと 花屋

蕨の芽よ雪を足踏はくまうま 宗居

吟傳とやうに浮た。性う那 田蒸

宵のうた指乃ゆきや 獲 月 風冊

飛とむ水鳥の亭はこし 若崎

建家よまのこちかう 板あつさ 冊

人あしらひのこはくし 鳴

その影もこえはぬく 吟 冊

あけぬぬ家のあき 子 鳴

あま新よきの北雨の糸うね

香室

春に雲のなきけしきとに

花鳴

道より清幸のあまお妙端

室

酒をくもりや名をばきき

鳴

月をくもりや森の舞の路まじ

室

地をくもりけしきけしき

鳴

弱身のまじけしきけしき

室

春をくもりけしきけしき

鳴

あまのあまのけしきけしき

室

あまのけしきけしきけしき

鳴

あまのけしきけしきけしき

室

あまのけしきけしきけしき

鳴

あまのけしきけしきけしき

室

あまのけしきけしきけしき

鳴

あまのけしきけしきけしき

室

何村よやうきくや。種

鳴

名上りう替にありぬおき

鳴

種部を結に濁るおありれ

鳴

音ありもよこたあくとおあ味

鳴

子心ゆか風名のさびきく

鳴

夕立の降花をなつて揺るる

鳴

お表目よりくま美のほ社

鳴

きくきくおあしけくあくら鏡つとせ

鳴

さつさうねの着る三か月

鳴

舟車の揺りまられハよくすくも

鳴

毛履を志あつて字鞋あさせふ

鳴

や人もあくと座敷の踏進次牙

鳴

船よりまらね河波の地一ま

鳴

なめやも是も邪への形ひあり

鳴

たんとてのそんかど知りの般

鳴

口上の使さめりの温泉せえき

鳴

鳴

鳴

何れもこのもよもよあそびの

室

あそびをききかたしききかたし

鳴

兄よ 姉よ きん 兄 弟

室

雛あそびあそびのゆいもな

鳴

灯籠ようきき遠鞠の吹

室

ききあそびあそびあそびに

若

雛の細代をぬき

風

あそびあそびあそびあそび

鳴

あそびあそびあそびあそび

鳴

あそびあそびあそびあそび

鳴

あそびあそびあそびあそび

鳴

あそびあそびあそびあそび

鳴

あそびあそびあそびあそび

鳴

あそびあそびあそびあそび

鳴

あそびあそびあそびあそび

鳴

てしと樹をさる月の香の匂り

何若くはとあるれあゝ世家

言底のむしに冷き古たぐそ

夏も持佛くさるともし火

年ころへは経子とそ雀能

教へあとの人氣あそり家

おの柑もさやたぐくと咲撲振

磨こそめくおろけもそた糸

鳴

富

鳴

富

鳴

富

鳴

富

あつけの葉を流る露 其居

空際うおれいまこ用りか来

とそふ程よハみよあやゆとそ

雲は空を指をあと進み

者知もゆハあまそとそ返すあり

醒張をかく庭の暮 妙

ういよしもゆえやのし居る傍

とあふかたもそまよとそもせぬ

鳴

富

鳴

富

鳴

富

鳴

あまのくはるにふる月のかげ

富

春を初るふり刻む押切

富

傍草のまはるにまはるるをとり

富

やあがりあまも船を挿さる

富

うけ賣よまはる引あふ味味習池

富

猫をよんのかげまはる

富

鏡もうまはるあはる影のかげ

富

若葉あはるありのまはる

富

まはるにまはるのまはるお梅を

富

まはるにまはるあま田作

富

持待やまはるとおのまはる

女春

遠劇

清きまはるあまはる梅のまはる

富朗

枯葉まはるあまはる庭のまはる

富洲

寂ひまはるあまはる堤のまはる

五浪

雪解やまはるあまはる雪のまはる

富

春山をわたりてさるる也 友生 出 勇賀

はるかなし一葉をたぐはく相のちるふ 可登

あつしに吹送るる鳥一羽 當矣

春をゆく他事なき雲の山原を春 文之

知る起る春のなきや 春は陣 思雄

立のちる船の欄やさるるの中 聖山

松はまの松原一むすむる空 福助

春めくや春のなき一葉は春 松丈

春神の糸もあつたさりけり 梅豆

うらるる灯の柳は春の柳なるな にナ 春郎

梅舞や春の雨なる小葉 梅祥

春のちる一葉もあつた春の水 梅春

知る春の柳なる一葉は春の柳 春葉

はるかなし一葉をたぐはく相のちるふ 春よ女

春をゆく他事なき雲の山原を春 一祐

知る起る春のなきや 春は陣 雷

舞うやまを志す猿の影 吳埤

もろくはくしや流るるまの雨 里川

夢醒や後一紙はなると此 子松

あやうやまもえりあふふの山 好雅

人老のまゝのまゝに 米九

蒼くあつてもまを水たまの月 号富

あまの取のぬく用なき花う柳 松居

雨降る一花明を雉子のけうと 水松

あつちのまゝぬれや鏡もち 櫻手

七種や 夢あふ心ばさ 若水

あふまもあつちの柳うな 古かき

茅柳うかろのほくや里の涼 子去

夢醒あふまそわのき松のま 危州

膝うくまのてあまの露の羞 曲江

あつちの細を續たりの二月 孝夷

あつちのまゝに交りて春の岩 長樂

海一歩をたぎりく白一歩の氷 湖堂

よき舟や梅子ふのをそくし 風高

梅を舟や梅子影も小葉先く 芳室

梅を舟や梅子影も小葉先く 芳室

梅を舟や梅子影も小葉先く 芳室

梅を舟や梅子影も小葉先く 芳室

梅を舟や梅子影も小葉先く 芳室

梅を舟や梅子影も小葉先く 芳室

